

未来への伝承

師を敬う気持ちく法雲寺出土の銘瓦からく

今回は、高岡にある臨済宗の古刹法雲寺で出土した室町時代の瓦と、その中でも文字が刻まれた珍しい瓦を紹介합니다。

法雲寺における中世の瓦は、ほとんどが現在の境内西側の墓地周辺から出土しています。どうやらこの付近に中世の瓦葺きの建物があったようです。瓦には様々な種類や形がありますが、屋根の先端部(軒)に使う瓦は最も近く



▲法雲寺出土瓦(左上:波状文、右上:三巴文、下:唐草文)

目に触れやすいため、文様をつけて裝飾します。軒先の瓦は丸い形状を軒丸瓦、横に平たい形状を軒平瓦と呼びます。軒丸瓦の文様には水の中の渦巻きに似た三巴文、軒平瓦の文様には唐草を上下に対照的に配置した唐草文、3条または4条の波状文を左右に数点配置した波状文があります。

瓦の文様は、主に木で作った型を瓦の粘土に押し付けて作ります。型は何十、何百と同じ瓦を作る過程で摩滅したり、傷がついたりします。この瓦文様の大きさと、跡として残った摩滅や傷の広がり具合を観察し、遠隔地で出土した瓦同士を調べます。文様がぴったり合えば同じ型で作られたことが分かり、同じ型作りでも傷があれば長年使われた型で作った新しい瓦であることが分かります。

県内の室町時代の瓦を調査した結果、桜川市の松田古墳群のほか、つくば市の上野古屋敷遺跡、東海村の村松白根遺跡といった大規模な集落遺跡からも法雲寺と同じ型作りの瓦が見つかりました。型の摩滅具合から、つくば市と東海村の瓦は法雲寺の後で、桜川市の瓦は法雲寺の前に作られたこ

とが分かりました。後者では出土瓦の数が少なく、他に墓地なども見つかったことから、集落に伴う墓地に伴う小さなお堂に瓦を用いていた可能性が考えられます。

法雲寺出土瓦の中で特に注目すべき資料に、「敬奉」と軒丸瓦の文様の裏面にへうで文字を書いた瓦が挙げられます。瓦に文字を刻む例は、鎌倉時代から室町時代の初めにかけては非常に少なく、室町時代の中頃から安土桃山時代にかけて急激に増加します。その多くは、瓦作りの職人が自分の姓名を記す例や、建物や瓦が作られた年号を記すもので、漢字とかな文字を併用しています。今回の例は「敬意を表する」という文意から、自分よりも上位の人への感謝を意図するものと考えられます。また漢文的な読み方や文字の書き



▲「敬奉」銘瓦

▼「敬奉」瓦の表面(三巴文)



方が明確であることから、職人よりも僧侶の手によるものと推定されます。法雲寺は、復庵宗已によって文和3年(1353)に、それまでであった正受庵を改めて建立されました。復庵はかつて中国天目山で修行した時の師の中峰明本和尚を尊敬し、その法を継いで法雲寺の第1世としています。

それを踏まえると、この瓦は法雲寺が創建された時に作られた瓦で、「敬し奉る」対象は中峰和尚、刻んだ人物は復庵和尚である可能性が想定されます。寺が完成した時点で、中国で既に没した師を思い出し、敬う気持ちを瓦にこめて建物に用いた。そのような気持ちが表現されているのではないかと考えます。

法雲寺出土の瓦は、5月6日まで開催中のテーマ展「古代のむらと中世寺院」で展示しています。この記事以外にも様々な貴重な発見例や出土資料を見ることが出来ますので、ぜひ足をお運びください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場
(0826・7111)